

明治開化期文學集

日本近代文

日本近代文学大系 1

明治開化期文學集

解説	興津	要
注釈	興津	要
	前田	愛



角川書店

興津 要（おきつかなめ）

大正13年（1924）栃木県に生まれる。昭和24年（1949）早稲田大学文学部国文学科卒業。日本近世文学専攻。現在早稲田大学教育学部教授。主著『転換期の文学—江戸から明治へ』（昭38 早大出版部），『大衆文学の映像』（昭42 桜楓社），『落語—笑いの年輪』（昭43 角川書店），『明治開化期文学の研究』（昭43 桜楓社），『日本文学と落語』（昭45 桜楓社）。

前田 愛（まえだあい）

昭和7年（1932）神奈川県に生まれる。昭和32年（1957）東京大学文学部国文学科卒業。幕末・明治初期文学専攻。現在立教大学文学部助教授。主要論文「音読から黙読へ」（『国語と国文学』昭37・6），『『板橋雑記』と『柳橋新誌』（『国語と国文学』昭39・3），『『八大伝』の世界』（『文学』昭44・12）。

日本近代文学大系 全60巻

第1巻 明治開化期文学集

昭和45年12月10日 初版発行



別巻引換券は最終回配本まで
保存しておいて下さい。

発行所 株式会社 角川書店

注 釈 者	興 津 要
	前 田 愛
発 行 者	角 川 源 義
印 刷 者	中 村 武
製 本 者	鈴 木 俊 一

東京都千代田区富士見2-13-3
電話東京（265）7111〈大代表〉
振替東京 195208
郵便番号 102

落丁・乱丁本はお取替えいたします

信教印刷・鈴木製本

目次

凡例

五

明治開化期文学集解説

興津

要七

明治開化期文学集注釈

仮名垣魯文

牛店
雑談

安愚楽鍋

興津

要三

久保田彦作

鳥追阿松海上新話

前田

愛三五

成島柳北

柳橋新誌

前田

愛一三

三遊亭円朝

怪談牡丹燈籠

興津

要二五

補注

四九

關係地図

四五

参考文献

四六

年譜

四〇

凡 例

一、本書には、仮名垣魯文の『牛店雑談 安愚楽鍋』、久保田彦作の『鳥追阿松海上新話』、成島柳北の『柳橋新誌』、三遊亭円朝の『怪談牡丹燈籠』の四篇を収録した。

一、本書は、解説・作品本文・本文に関する注釈（頭注および補注）・参考文献・年譜をもって構成した。

一、作品本文の底本に関しては、左記の通りである。

○『牛店雑談 安愚楽鍋』は、同名の初版本（全三編五冊、初・二編、明4・4、三編、明5春、誠之堂刊）を用いた。本文では全文について新たに句読点を補ったが、その際、『明治開化期文学集（一）』（明治文学全集）1 昭41・1 筑摩書房刊）所収の本文を参照した。

○『鳥追阿松海上新話』は、同名の初版本（全三編九冊、明11・2—3 錦榮堂刊）を用いた。本文では全文について新たに句読点を施したほか、固有名詞として浜田正司と庄司があるのを正司に統一したなど若干の訂正を加えたところもある。なお、その際、『明治開化期文学集（一）』（前出）所収の本文を参照した。

○『柳橋新誌』は、同名の黄表紙刊本（初編、明7・4、二編、明7・2 山城屋政吉板）を用いたほか、『柳橋新誌三編序』は、『花月新誌』一号（明10・1）を、『柳橋新誌三篇の叙』は、『花月新誌』一〇号（明10・5）を用いた。原文は漢文であるが、本文では全文書き下しに改めた（漢字は原文通り、かなづかいに旧かなづかい）。その際、『成島柳北・服部撫松・栗本鋤雲集』（明治文学全集）4 昭44・8 筑摩書房刊）所収の本文を参照した。

○『怪談牡丹燈籠』は、『三遊亭円朝集』（明治文学全集）10 昭40・6 筑摩書房刊）所収の本文を用いた。本文では全文について新たに句読点を施したほか、固有名詞として黒川幸蔵と孝蔵があるのを孝蔵に統一したなど若干の訂正を加えたところもある。なお、その際、初版本（全一三編、明17・7—12、東京稗史出版社刊）を用いて校合した。

一、本文の表記は、『牛店雑談 安愚楽鍋』『鳥追阿松海上新話』『怪談牡丹燈籠』の三編について底本で用いられていた変体が一

を原則として通常の平がなに改めた。ほか前項で特に記した事項以外、漢字表記も含めて底本に従った。ただし、読者の便宜のため、読みにくいと思われる語については、新たにルビを補った。その場合は（ ）で囲んで底本のルビとは区別し、かなづかいが旧かなづかいとした。

一、注釈は頭注と補注から成る。頭注は本文に一、二、三……の番号を付した部分について施し、さらに必要と思われるものについては、これを補注で補った。本文の頭注番号は見開き二ページごとの通し番号となっている。

一、注釈の表記は、新字新かなによることを原則としたが、引用文ではかなづかいのみ原文のままとした。また、難読漢字の読みは（ ）に入れてその語の下に置いた。

一、注釈中の数字は、引用文を除き「十二」「二百三」とはせず、「一二」「二〇三」のように表記した。ただし、年号を（ ）の中に入れる場合は洋数字により、（明³²・3）（大¹⁴・10）のように示し、明治以降の年号にかぎっては、それぞれ、明・大・昭と略記した。

一、注釈で各種文献から引用しまたは文献に言及する場合、単行本は『』、新聞・雑誌および作品の題名・論文名などは「」で示した。

一、注釈は、先行研究の成果をとりいれながら、作品の主題、発想、構成、文体、語法などにかかわる事項注に重点を置き、必要最少限の語釈を加えた。また原則として、頭注は、表現に密着しながら作品を客観的に鑑賞していくことを主とし、補注では、典拠の考証、作品の特色や背景・成立事情、先行研究の紹介・検討など作品論の領域に及んでいる。

一、巻末に『柳橋新誌』関係地図を掲げ、鑑賞・研究の利用に供した。

一、本文中の挿し絵は可能な限り収録することを旨としたが、「怪談牡丹燈籠」の挿し絵は紙幅の関係もあって全て省略した。なお、「柳橋新誌」初編冒頭の挿し絵（柳橋全景）は青表紙本（刊期不明。黄表紙本初編には挿し絵はない）から採録した。また、「牛店難談安愚楽鍋」「鳥追阿松海上新話」の挿し絵はいずれも抄録したものである。

解 說

明治開化期文学集解説

興津 要

明治初期戯作界と仮名垣魯文

一 『西洋道中膝栗毛』への道

明治初期は、戯作者たちの受難時代だった。

まず明治維新の混乱の中にあつて、戯作の出版が不振だったのも当然で、明治元年二年のおもな作品といえば、幕末から続刊の『釈迦八相倭文庫』^{しやかうはさうやまふくこ}『児雷也豪傑譚』^{こらいやごうたつたん}『室町源氏胡蝶巻』^{むろまちげんじこてまき}などの長篇草双紙がほとんどで、新刊としては、松林伯円の講談を合巻化した仮名垣魯文の『薄緑娘白浪』^{うすみどりむすめしらなみ}や、同じく講釈種の二世春水作『厚化粧万年島田』などがあつたにすぎなかった。

このような状況下にあつては、対馬藩士染崎延房として、初め徒士より出て郡奉行代理となり、廃藩後、勘定所総理勤務となつた二世春水や、金満家服部長狭勾当^{ながさこうどう}の家に生まれた万亭応賀などはよかったとしても、恒産のない庶民出身の戯作者^{かながきろ}仮名垣魯文や山々亭^{さんざんてい}有人^{うりんと}はにわかに生活に窮することになった。

当時の代表的戯作者魯文の生涯をまず展望しておこう。

彼は、文政一二年（一八二九）一月六日、京橋鎗屋町の魚屋の長男として生まれた。幼名兼吉、のち庫七、文蔵と称した。

祖先は、相模国高座郡萩園村で、代々農業に従事していたが、祖父藤助は、東海国道のかたわら引地村において鎌鍛冶を業とし、父佐吉は祖父藤助と妻をつれて文政初年に江戸へ出て、京橋鎗屋町に魚屋を開いた。

同じ末期戯作者でありながら、武家出身の梅亭金鷲や二世春水が、出身階級からの重荷を生涯背負ったのに対し、魯文は、庶民出身の無思想による身軽さから時勢に応じて転身することができたのだった。

天保八年（一八三七）春、九歳の魯文は、新橋竹川町の諸藩用達鳥羽屋多吉方へ一〇年の年期で丁稚奉公に上がった。それは、火災のために家運が傾き、父も棒手ふりに落ちぶれ、飢饉による困窮も手伝い、口減らしにせまられたためだった。後の魯文が、常に陽の当たる場所を求めてあくせくと転身したのも、この時代からの生活苦が骨身に徹していたためだった。丁稚になった魯文は、戯作本を愛好し、小遣銭で膝栗毛を買って通読するのを楽しみ、親戚の鳥羽屋に預けられていた若い日の細木香以に愛されて、その導きで俳諧や狂歌をたしなみ、やがて香以の口添えで、戯作者花笠文京に入門し、和堂珍海から英魯文^{はななき}となって戯作界に入り、そのためには遊蕩の経験も必要だと妓楼に入りびたり、清元、常磐津の稽古所へ通い、やりくりの金に窮して主家にいられず、放浪生活を送るうち、書肆から湯島妻恋町に家を買ひ与えられた。

このころ、彼は鈍亭魯文と称し、〈談笑風談 滑稽道場 御詠案文著作所〉と看板を出した通り、出版業者の注文のままに稿料も低くして売らんかなの姿勢で合巻類を執筆し、瓦版や流行端唄のように流行を追う仕事を手がけ、その際物師としての腕を買われて、安政二年（一八五五）の大地震の際には、ルポルタージュ『安政見聞誌』三冊を三昼夜で脱稿する離れわざをやっていた。

万延元年（一八六〇）、仮名垣と改めた魯文は、出世作『滑稽富士詣』を刊行した。

これは、際物作家魯文らしく、女子も富士登山を許された、開闢以来三七度目の庚申の年を当て込んだ作品であり、題材も彼が丁稚時代から慣れ親しんできた膝栗毛物なので、筆もスムーズに進んだ。その執筆に当たっては、十返舎一九や滝亭鯉丈など先行滑稽本のギャグを十分に借用したが、特に異国風俗を配するところに特色を示した。

それはたとえば、前年に開港したばかりの横浜が舞台となり、登場人物も玉墨藏、松郎助、蛇賀太郎、髭吉であったり、英吉、蘭太、黒介であったり、趣向も、異人屋敷からのがれてきた「らしやめん」を巡る騒ぎ、旅人の異太郎、蛮助、通次郎が、変装して異人専門の港崎遊廓に繰り込んでの失敗など、当時の戯作界における出色な色彩だった。

彼は、『滑稽富士詣』において、異国風俗を道具立てに使ったが、際物作家の彼はそんな中途半端な状態にとどまらず、著作それ自体、異国風俗を対象とする合巻を刊行した。すなわち、ワシントンをはじめとする偉人伝中心の歴史書風の『万国人物図絵』（文久元年）と、欧米を紹介した地理書的な『童絵解万国嘲』（同年）とがそれだった。当時において、『緑柳五ヶ国草紙』（山亭秋信作）のように、アメリカを舞台にしたお家騒動物もあったが、魯文の異国物は際立っていた。それは、最下層の庶民出身の魯文が、生活のために各種の文章を書きまくり、その無思想な身軽さからつかんだ際物師としての手腕の賜物だった。そのようにして蓄積されていった手腕が、明治開化期に花開いていった。

『滑稽富士詣』で売り出した彼は、文久年間にはすでに中堅の存在だった。というのは、当時江戸の文人の間に流行した三題嘲はなしの会に、彼は常連として出席し、その連中の略伝や自作の嘲を掲載した『粹興奇人伝』（文久三年）を山々亭有人とともに、編集していたからだだった。しかし、それにもかかわらず、生活は筆一本では成り立たず、パトロンによりすがって生きねばならなかった。この三題嘲グループ「粹狂連」は、金座役人高野某（号松花園、桜垣）が主宰し、「興笑連」は、大伝馬町の富豪勝田某（号春の屋幾久）が中心となったように、いずれも魯文の後援者によって運営されていたところに、当時の魯文の生き方がうかがわれた。

そんな生き方を続ける魯文にとって、前記のように出版は不振であり、幕臣や幕府御用商人であったパトロンたち自体が方向を見失った明治維新の訪れは、精神的に、経済的に大打撃だった。

明治二年、魯文が山々亭有人とともに、なにか臨時の収入を得ようとたくらんで、山東京伝の机塚修繕を名目に花会を開こうとして、その意図を見抜かれて失敗に終わったというエピソードは、魯文の、というよりも、当時の戯作界の困惑ぶりを示すものだった。

しかし、この極度な混乱もやや治った明治三、四年になると、戯作界は新しい動きをみせた。

明治二年、福沢諭吉の啓蒙書『世界国尽』が刊行され、「世界は広し万国は おほしといへど大凡 五に分けし名目は 亜細亜阿非利加欧羅巴 北と南の亜米利加に 堺かぎりて五大州……」という七五調のリズミカルな文句が人々の口の端にのぼり、庶民の目が広い世界に向けられつつあった明治三年、魯文は、『西洋道中膝栗毛』初編を刊行して、開化期戯作界の花形作家としての第一歩を踏み出すことになった。

魯文は、この年、この作品に先立って、同じ福沢の『世界国尽』のパロディ版『苦界文尽』を刊行し、「苦界は憂し間夫客は多しといへど大凡五に分けし町目は揚屋角京新町と西と東の江戸町に境かぎりて阿茶屋洲……」などとしやれのめしてみたものの成功しなかったために、同じ福沢の『西洋事情』『西洋旅案内』、内田正雄の『輿地誌略』などの西洋案内書や、フランスから帰朝した友人富田砂燕の体験談などをたよりにして『西洋道中膝栗毛』を刊行したのだった。

内容は、横浜で、西洋初の安舗を営む、十返舎一九の『道中膝栗毛』の弥次、喜多の孫に当たる弥次、喜多が、同地の大商人大腹屋広蔵の供をして、ロンドンの万国博覧会を見物に行くというストーリーで、徳川三百年の鎖国から解放されて、始めて世界へ旅行した日本の庶民の困惑、ろうばいぶりが、先行の『膝栗毛』『七偏人』などの滑稽本のくすぐりを焼き直してよく描かれていた。

全篇いたるところにみられる弥次喜多の失敗ぶりは、後進国日本の庶民たちのコンプレックスの表われでもあったろう。ともあれ、この作品はヒットした。

当編也世界第一。滑稽稗史の駿足にして。一鞭千里の大評判。内地の看官は勿論、横浜築地に在留の外客競ひて購ひ求め。寸暇に学び読まざるはなし。既に当時尾州名古屋。古袖町の戯場に於て。是を脚色て人気を引くも。此膝栗毛の驥尾に付き。目的の当利を覘ふが為なり。かゝれば魯文先生の雷名交際の各国に轟きわたり。目今仏國の曲馬師。スリエなる個。曲馬興行の告条及び。自己の伝記旅中の紀行。なんどの倭解を乞へるといへるも又膝栗毛の余沢にして所謂馬は馬連の因縁にやあらんかし。……那夢伝盲屋老人題（十編後序）

という文章は、ある程度割引して考えなくてはならないにしても、文明開化期の大衆にこの作品がアピールしたことは確かだったし、それは、時代の動向に敏感な魯文のアイディアの勝利でもあった。

二 『安愚楽鍋』をめぐる

『西洋道中膝栗毛』の好評に気をよくした魯文は、翌四年の四月、あるいは五月に、『牛店難談安愚楽鍋 一名奴論建』初編一冊を刊行した。続いて同年、二編上、下二冊が刊行され、翌五年春に三編上、下二冊も刊行された。書型は中本で、青ねず

み色表紙。一恵斎芳幾、惺々 曉斎画であり、題簽は『牛店安愚樂鍋』。内題は『牛店 維談安愚樂鍋 一名 奴論建』。柱題は「牛店」。丁数は、初編二六丁、二編上二五丁、下二三丁、三編上二六丁、下二二丁。版元は誠之堂だった。

これは、半ば空想で書かれた『西洋道中膝栗毛』に比べるとリアルな作品で、開化鍋と呼ばれた牛鍋を、あぐらをかきながら楽しんで食べる庶民の姿を、式亭三馬の『銘酩酊質』などの滑稽本の方法によって描いたものだった。

牛肉を食することは、八世紀の奈良時代に仏教思想の普及から禁断されて以来幕末に至るまでその状態が続いていたのを、外国人が牛肉を食べるのにならって、文久二年に、横浜住吉町の居酒屋伊勢熊で日本人むきの牛鍋屋を初めて開業してからしだいに普及し、東京でも明治に入ると、茅場町の米久、黒船町の富士山、柳原の中川屋など、「御養生牛肉」の看板を掲げ、「牛肉鍋一人前三百文」という格好の値段で人気を集めていた。

時勢をみるのに敏感な魯文は、さっそくこの牛鍋屋を作品の舞台に取り上げ、そこに集まる旧時代的な人物、あるいは新時代的な人物や風俗などを、登場人物のことばを通じて描いていた。

それはたとえば、「西洋好の聴取」で、「シャボン」を使い、「ラーテコロリといへる香水」をつけ、「カナキンではりたるかうもりがさ」を持ち、「袖時計」をさげ、肉食することに文明開化を誇り、蒸気車、伝信機、風船などについての知識をひけらかすなどの態度に鮮やかに開化風俗が描かれており、そのほか「鄙武士の独益」に、当時の書生の風俗がみられ、「人車の引力語」に、人力車夫の生態がいきいと描かれ、「商法個の胸會計」に新時代の商法がうかがわれ、「藪医生の不養生」に、逆に時代に取り残される漢方医の姿も登場するなど、文明開化風俗絵巻がいかにもはつらつと展開されていた。しかし、それはあくまでも江戸滑稽本風な表面的な現象描写であり、浅薄な文明開化風俗を批判したり、風刺したりするという高度な文学とはなりえていなかったが、それがまた彼の限界でもあった。

明治五年には、『相伝胡瓜遣』が、惺々 曉斎の画で万笈閣から刊行された。

彼が序文でいうように、福沢諭吉の『窮理図解』を「胡瓜遣」と、同音で響けたところがミソで、たとえば、「空氣の事」ならぬ「食氣の事」が、貧書生が筆耕で得た金で食べまくる話であるというたぐいの、『窮理図解』とは全く関係ない、完全なナンセンス文学だった。ただし、そのようなナンセンスな話の中にも、「……花やしきの楽眼屈で西洋目鏡の銅板を見たり北庭が処に寄つて写真をひやかしたりスリエの曲馬の看板ばかりを見物して……」というような文明開化風俗が巧みに

描きだされていたことによって、文明開化熱に浮かされていた当時の読者の興味を引いていた。

三 「三条の教憲」の発令

以上のように活気を取りもどしかけた戯作界ではあったが、流行作家の魯文にしても、その収入は「僅々数ヶ月の暮し向を支へるに過ぎず」（野崎左文『私の見た明治文壇』）という有様で、その方向が完全に定まるといふ訳にはいかなかった。

そればかりではなく、もともと低級視されていた戯作が、明治初期の実学尊重の時代において、なんらの制約を受けずに生長し続けるべくもなかった。

戯作軽視、排斥の声が一方においてあがっていた。

たとえば、明治二年五月の「公議所議案録」をみると、次のような記事がみられる。

贅書ヲ焚クノ議 昌平学校教授試補長野卓之允

謹按スルニ、漢籍ハ上古皇猷ニ合符スルヲ以テ、天下ニ頒シ、誦習講明頗ル裨益之レアリ候処、輒近船載ノ書籍充棟汗牛、無用ノ文字過半ニ属シ、陋儒輩踵テ起リ、遺本馳末或ハ浮華ノ文墨ヲ主張シ、或ハ章句ノ末義ニ拘泥シ、世ニ於テ決シテ輕重無キノミナラス、後進ノ徒相率テ其陋習ニ漸染シ、甚政化ニ害アリ。願クハ章句註解の末説浮華諧謔ノ文辭、其他天下ニ裨益之レ無キ書籍、尽ク灰塵ニ御付シ被遊候ハハ、天下從來ノ陋習ヲ一洗シ、人々眼目ヲ拭ヒ、經濟有用ノ学ヲ磨礪シ、而シテ邁世ノ俊傑出ツ可シト奉存候間、御下問相成度候事。

以上は、漢学界における詩文などの風流文学の排斥なのだが、当然戯作などへの風当たりはより強いはずだった。

また、公議所が、明治二年七月に集議院となった後、十一月の議案に、「一、主上へ御実学ヲ勸メ奉ル事」（小巡察斎藤某の父斎藤貞蔵）というのがあるが、実学奨励が天皇にまでいったところに、この時期の実学尊重思想の激しさがうかがわれる。この実学尊重思想は、福沢諭吉の『学問のすすめ』（明治五年）初編にもみられた。

学問とは唯むづかしき字を知り解し難き古文を読み和歌を楽み詩を作るなど世上に実のなき文学を云ふにあらずこれ等の文学も自から人の心を悦ばしめ随分調法なるものなれども古来世間の儒者和学者などの申すやうさまであがめ貴むべ

きものにあらず古来漢学者に世帯持の上手なる者も少く和歌をよくして商売に巧者なる町人も稀なりこれがため心ある町人百姓は其子の學問に出精するを見てやがて身代を持崩すならんとて親心に心配する者あり無理ならぬことなり畢竟其學問の実に遠くして日用の間に合はぬ証拠なりされば今斯る実なき學問は先づ次にし専ら勤むべきは人間普通日用に近き実學なり……

というように、実學的、功利的提案だった。

以上のように、極端な実學尊重時代であつてみれば、戯作者たちが、たとえば魯文のように、單に文明開化風俗を表面的に描写するという技巧偏重の態度では、新時代に対応できないところまできていた。

そのように方向を見いだしえなかった戯作者たちのその後の生涯を決定したのは、明治五年四月に教部省から發令された「三条の教憲」だった。

一、敬神愛國ノ旨ヲ体ス可キコト

二、天理人道ヲ明ニスベキコト

三、皇上ヲ奉戴シ朝旨ヲ遵守セシムベキコト

これは、かんなら惟神の道に実學思想や合理精神をも加えた國教宣布の教憲で、この中には、廃藩置縣後の思想統一というねらいが強かったようだ。そして、その普及のために、神道家、仏教家、民間有識者などが教導職として動員されたが、さらに、戯作者、俳優、講釈師などまでが、その作品や舞台を通じて啓蒙に一役買うべく要請された。政府にしてみれば、芸術の価値を完全に認識した訳ではなくて、教憲の趣旨普及のために文學や演劇を利用してやれという功利的な立ち場に立った訳だったが、江戸時代において無視され、明治時代に入っても有害視されてきた戯作界にとっては空前の榮譽だった。

すでに述べたように、幕末においては、精神的にも経済的にも寄生生活にあった戯作者たちは、寄生すべき後ろだての見いだせぬこの時期において政府の命を受けたことは、へ賤業「賤業」戯作にとつての名誉であるばかりでなく、精神的支柱を得たことであり、「爾後從來ノ作風ヲ一變シ、乍レ恐教則三条ノ御趣旨ニモトツキ著作可レ仕ト商議決定仕候」というように、從來、へ虚「虚」の世界にあった作風を廃し、へ実「実」の世界へ進むことを誓った答申書「著作道書キ上ゲ」を、代表者条野有人、仮名垣魯文の名で、七月に提出し、直ちに政府の意を奉じた。